



「第二章 イシオキク」

1

鈴の音を思わせる、清らかな音。

季節の涼やかな夜風が辺りに吹き抜ける。

刀郷も、中秋はまだ少し先であるが、今夜の月も煌々と空にあって、夜暗の街中を往く人々を照らし、見守っている。

品川の宿場から距離をおいた市井街。こじんまりとした呑み屋を出たその男は、店の表でその日の酒の連れと別れた。その様子を店主が頭を垂れて見送った。

酔いを冷ますように、夜風を身に受けてゆっくりと歩く男の腰には、一振りの刀——それが示すように、この男は武侠である。

郷の西の土地を帯刀して歩く。それだけで、『最強の獅士』の威光を発しているのだという事を、男は知っている。だが、だからといってこの男が、威を借り、武侠としての気位に抵触している訳ではない。

この男を知る者は彼の強さを知っている。男が一武侠として、生死を賭けた太刀合いに差し向かい、怯する心に駆られたり、卑怯な闘いをしてまで無様に生き延びようという己を許さない——心の強さを持っている事を。

その証拠に、先程から後方にある気配に対して、居竦むことなく足運びは揺るぎない。

そして数間を進み、ふと道行く先の気配が不穏に動くのに男は気付く。同時に先程からの周囲の足音にも変化があった。

だがそれでも、鼓動以外で狼狽えはしなかった。

夜暗に眼光を走らせ、意識を張る。視線を巡らせると、辺りは民家が軒を連ねる以外は、蠢く不穏な気配意外に人影はない。

(なんだ、やる気か？ まあ、受けて立つがな)

迅速に腹積もりが決まる辺りに、この男の武侠としての練度と胆力が窺える。そうして前方の気配に注力すると、それに応じるように月明かりに、ぼうと

第二章 太刀の光

浮かび上がるうっすらと煌めく 『刀』 の光。

男はそれに対して僅かに眉を動かし、しかし後ずさることなく立ち足を決め、意を構える。

『刀』——木刀とは違い、実際に人の肉を斬り骨を断つ、武侠のエモノ。その刀身の重く、冷たい煌めきが月光にも映えて——鋭さが瞭然だ。

それを抜き放ち、男の行く手に立つ人物。

影の中でちらちらと煌めくその刀が、襲ね菊の鐔をしているのを男は見た。

闇に溶けるように背後の影が動き、男の周囲を囲む。

(三……、四人?)

「獅土堂の一派の武侠とお見受けする」

前方から響く、低い声。男だ。

(刺客か)

男は自らの周りの影と、その目的にアタリをつける。

ここは青刃のシマ。東西の境界に近い。向こうの武侠が入り込むこともあると、男は地元の者として心得があった。

何よりも、白刃^は斬尖を向けて問い質すその言葉で、^{きやつ}彼奴らの意思は、喉に指を突っ込んだら嘔吐くのと同じくらい明らかだ。

そして男は酒の酔いが飛び、意識が鬨の血潮によって研ぎ澄まされていく。夜暗の先の刀光りに応じるように、鯉口を切り、刀身を慎重にすべらせ始める。

「……………マジロウ、参る」

その言葉が最後だった。

男が刺客——目の前の名乗りをあげた男——の動きに応じて、電光のような抜き打ちと斬り返しで迎え撃つ。

刃鳴りが数閃。刀が火花を散らした。

男は突然の刺客との太刀合いに、考えずとも思考を走らせる。

己自身、武侠である身の上以外で、人に狙われる謂れは恐らく、ない。心当たりも、身に覚えもないと思うのだ。

しかし、この郷で武侠たらんとした男は、刀が放つ光と相對したならば、それが如何に理不尽に類することであっても、それに対して怯懦に吞まれず、己

第二章 太刀の壱

が闘い――眼前の太刀合いに真っ向から挑んだ。

この男は刀郷の武俠として武俠らしくあり、そうして逝ったのだ。

周囲の数人が、武俠を斬り伏せた物珍しい鐔をつけた刀をさげた男へと歩み寄る。その間に、男は菊鐔の刀を血振りし、懐から取り出した懐紙で刀の血を拭った。そしてその懐紙を小さくまとめ、斬られた武俠の着物のたもと袂に押し込んだ。

血を流し、こと切れた男をその場に、立ち去る刺客達。

月夜に肅然と行われた兇行。しかし、その行いを月以外にも見つめるモノがあった。

刃の鋼が月光を反射し、血飛沫舞い散る様を視た――その瞳。

俠勇溢れる男が斬られ、斃れ伏す最中に、その身から迸った鮮血が、めったりと散りかかった民家の軒。その明かり窓が、誰に知られずとも開いている。

秋の虫の音は、一切に我関せずと鈴の音を奏で続けていた。

2

「じゃあ、今回の件をつきかりぐみ月艾組のから頼みます」

「応。ここらを預かります月艾組の頭です」

促された品川のシマの任侠頭、きよぎしたかさぶろう清岸高三郎は返事を返す。そして禿頭を回して、周囲の組頭を見遣る。

「話はウチの若いモンが進めます。みつとり光取、頼むぞ」

「はい、頭」

場に居並ぶのは一様にいかつい躰と、ドスの利いた顔ぶれ。その中にあって一室の上座の女性は、艶めかしい唇で猪口を口に付けている。話をする彼らをながし見るのは、春花だ。

彼女は虫の音の届く古雅な一室で、幾人もの男……その風体面構えから堅気ではないと知れる……と大卓を囲んでいた。

順々に膳に供される上品で食欲もそそる会席の料理と、優雅で見るからに高価そうな造りの食器、美しい金の彩りがある陶の猪口。金がかかっていると

第二章 太刀の壱

もに、歴史も感じさせる設えの二間。郷の西のシマにある料亭である。

この場に居並ぶのは、獅士堂の領内でも東に位置する、四聖 『青刃』 のシマの主だった任侠、武侠の組頭と、その側近.....幹部格の面々だ。

一同を前にし、自らの親分から紹介された光取という男は、整った目鼻立ちをした若い侠客だ。

「月艾組、若頭を務めることになりました、光取と申します。歴々の親分方には御目通し、今後お見知りおき下さいますよう、よろしく申し上げます」

律儀な前置きに、親分衆がそぞろに応、と相槌を返すと光取は、ではと話し始めた。

「今回の問題として取り上げる件は、先日ウチのシマで起こった刃傷沙汰です。斬られたのは武侠。男の名は金居^{かねい}荘兵。彼は高津のある道場の雇われ武侠です」

光取は金居の身の上を掻い摘んで話す。それによると、金居が身を寄せていた道場は、獅士堂傘下で西方よりの武術留学生も在籍し、彼はその指導と警護を近頃のたつきとしていた、という事だった。

「その金居が先日、道場の数人と品川の呑み屋でいくらか酒を呑み、店で他の者と別れて帰路についたところを襲われたそうです」

「酔った隙を狙われたか」

「うむ、^{かねいな}金居某 が酒に酔うのを待ち、かつ一人になるのも待ったうえで兇行に及んだのであれば、下手人は周到な奴よな」

「そう考えると、闇討ちという訳か」

周囲の親分が口を開いて、各々の意見を述べた。

「そのように思われます」 と居木は返し、続ける。

「しかし周到ではあっても、周密で精到ではなかったようです。その太刀回りの一部始終を、当地の住民が家屋内から目撃していたそうです」

その言葉に場がざわついた。

刀郷において刃傷太刀回りは日常的光景であり、道行く堅気にとっても時に足を止めない程に、それほど物珍し光景ではない。それはおそらく、この郷の民に訊いてみれば、町中で殺陣を目にした事は無い者はいないだろう、という事実からも明白だ。

第二章 太刀の壱

しかし、そうして斬られた者がいた現場を堅気の者が目撃していたとしても、それをシマを仕切る者達に申し出る人間は、実のところ非常に少ない。

それは、人命に係わる厄介事に首を突っ込んだりしたら、自分の身がどうなるかわかったモノではない、という一般的な見方が多分にある。そして同時に、武俠達が人斬りの道具を腰に下げ、威を張り往来を闊歩するのを疎む気持ちの表れでもある。

だから今回、斬られた者を意図的に狙った兇行——この場合の『闇討ち』ならば、目撃者が名乗り出てくれたというのは、状況を進めるのに話が早い。親分衆も前のめりになろうというものだ。

「よく堅気の者が話してくれたな」

場にあがる当然の疑問の声に、清岸親分は口元を歪めて答える。

「なに、どこのシマの堅気も、自分らに刃難の類が及ぶと知れたら、そりゃ協力的にもなりますわ」

いかにも含みがありそうな風だが、言っている事はもっともだ、と他の親分衆は彼に深く取り合わずに話題を進めた。

「では、下手人の顔は割れているのか？ 月艾組の」

「いえ、そういう訳ではないです」

^{にべ}膠も無い光取の返答に、居並ぶ親分衆があるいは舌打ちし、あるいは首を捻った。

そんな一同に、今度は禿頭を撫でて親分が続けた。

「しかし、その太刀回りを目撃した堅気というのは、幸運なことに中々目端の利く者でしてな。実はその話から判つとることがな.....五つある」

また場がざわついた。

「おお、五つもか」

「なんじゃ、有益なことなんじゃろうな」

「それは兎に角聞いてからだ、是非話してくれ」

酒を呑む手を止めて一同が清岸親分と光取を注視する。親分が隣の若頭を目で促した。

「はい。判っていることは、まず一つ。闇討ちを行った刺客は、複数人である

第二章 太刀の壱

こと。その人数は定かではありませんが、次に金居と直接刀を交えた相手の刀技は、真庭念流であること。目撃者は当流の足元を見知っていたそうです。三つ目は刺客の一人の刀の鐔です。菊模様をしていたということです」

「ふむ、面白いな。後の二つは？」

先を訊いてくる親分の一人に、光取は溜めることなく答えた。

「これは不確かなのですが、四つ目に相手は名乗りをあげていたそうです。——『マジロウ』と」

「……マジロウ？ 名か？ 姓は？」

「それがはっきり判らんかったと、堅気の者は困ったわ」

ワシらも困るんだがな、という他の親分の笑い声が上がる。

それが納まるのを待って、最後の一つが歴々の耳に届く。

「……これは少し珍しい事なのだそうですが、下手人は金居を斬った後に、刀の血を拭った懐紙を、彼の着物の袂に詰めています」

「……………」

その言葉の意味に、場の空気が一種微妙なモノになった。

ある者は任侠頭とはいえその所業の意味が解らない、といった風だ。また体格や肌の傷から武俠と取れる組頭や幹部は、これもまた不可思議そうな表情を作った。

「それは確かに珍しいですね」

ざわつく場に、凜とした、通る、美しい声が響いた。

親分一同が視た先には、静かに猪口に口をつける春花の姿。

彼女の言に、武俠の頭目は頷き、盃を突きだし応じ、任侠者達は首を傾げた。

そんな一同を見遣っていた、上座の脇の席に坐す『彼女』は、先程からの話を耳に入れる最中も止めなかった箸を置いて、口を開いた。

「……そんなに珍しいことなの？」

会席の二間通しの部屋。シマの歴々が集うという総会の場に不似合な、少し子供らしい風貌の彼女——雪絵は、そう隣の白峰に訊いた。

「ふむ」

その小声に応じて、普段から獅士堂の大幹部として会合に列席している白峰が、彼女の方を視た。

第二章 太刀の壱

こうして白峰を見ると、居並ぶ強面の俠達に引けをとらない、渋い顔を彼はしているという事が、あらためてよく知れる。その対比のように、雪絵は彩度を抑えた薄赤色の着物を纏い、長い黒髪を軽く結わえ、よそ行きの煌びやかさがある出で立ちで、どこの子だという行儀の良さで座っている。

そんな雪絵を見遣り、白峰は次いで彼女の面前の膳に視線をやる。

今回の卓に既に数皿が出て、今は秋刀魚の姿焼きが出されている。雪絵の皿は既に箸が休められ、魚の残り骨が懐紙で上品に隠されている。

この会席の場に集まっているのは、先にも述べたように獅士堂の治める、郷の西側のシマの……さらには青刃の預かるシマに近い地区、その主要な任侠、武俠の組頭と、幹部達だ。幹部会、または総会と呼ばれるこの会合は、多くの場合、武蔵野の獅士堂の本邸屋敷に面々を招集して行われる。しかしこうした宴席も、今回の例のように議題が地域性を帯びた場合などに都合がよく、季節に数度は執り行われる。

元々、組織の上役の中での一人、ないし二人が顔を出す席である。そう考えるとこの場に集まるのは郷に侠客数あれど、限られた顔ぶれになるのがわかる。

しかし雪絵はこうした場に今、居合わせて、動じる素振りも無い。

それはこの年の初夏の頃より、春花が彼女をこうした場に伴うことが増えて来たからに他ならない。

しかし雪絵のこれまでの育ちを考えると、彼女は多からず免疫がないこうした場に当惑してはいたのだろう。最初の頃は、格式ばり、作法も形式を求められる場だったので、経験がなかった雪絵は、色々とやらかして、（特に）白峰の肝を冷やさせた。

その様子は箸の取り方の三手から、袖越しを何度もしたり、豪奢な料理に食い意地が前に出て、もともと鋭い目つきでにらみ食いを何度もしたりと、それは見る者にとって散々だったものだ。

季節は巡り、秋。経験を重ね時が移ろえば、人は学び成長するもの。白峰は……そして密かに春花も、歴々の集う場での雪絵のマナーの上達ぶりを、安堵すると共に誇らしく思う。

しかしそれでも、まだまだ勉強が至らないところも多々ある、と白峰は歪みかけた口元の筋肉をキュッと引きしめる。

第二章 太刀の壱

今の問いがそれに当たるのだ。

小声だったにも拘わらず、雪絵の声に耳聡く反応して、彼女のはす向かいの
武俠の頭^{かしら}が口を開いた。

「坂本の秘蔵っ子も、まだ知らんことがあるか」

その声に合いの手があがる。目がつぶらな任侠組の頭だ。

「いやいや、武辺者でない組頭も知らん事だぞ。若い者をいじめてやるな」

それに乗じて組頭達がわいわいとして騒ぎ出す。

「お嬢が腕が立つのは、儂もその場でお嬢の太刀回りを見た若い衆から聞き及んでおるが、だが若いからと腕のみに頼ってはいかんぞ」

「こらこら、説教すな。総会にこんな若い子が顔を出すことなんぞ、これまでなかったんだしな。若い者の至らんところはア、皆で育ててやればいいではないか。のう」

そうだそうだ、と厳つい男達がどこか柔らかな貌で盛りあがった。

それに対して雪絵は、

「不勉強ゆえ、どうぞよろしく願いたします」

と、微笑んでこそいないが、よく研がれた刃物のような煌めきのある顔をしてみせる。

その様子に侠達は、一様に身をもじもじと振らせ、顎を搔き、咳払いをして、あるいは酒をあおり大いにむせた。

澄ましている雪絵を横目に、白峰は軽く臉をふせ、春花は静かに酒を呑んでいる。

「では、話を継いで、私から下手人のした事について説明しましょう」

光取の言葉に、組頭一同が顔を引きしめ、雪絵はこくりと頷いて返す。

「下手人が行ったのは、古くは武家の世にみられた作法です。刀の血を拭った懐紙を、斬った相手の着物の袂に押し込む。これを『隠しとどめ』と呼ぶそうです」

耳慣れない者も多かったのだろう、場は沈黙で先を促す。

「この意というのは、斬った者が咎を犯した恐怖から慌ててその場を逃げ出したというのではなく、冷静に斬った相手に処理をした、という証として行われたモノのようです」

第二章 太刀の壱

「……隠しとどめ」

それは雪絵も知り得ない、刀を振るううえでの行動だった。だがこれは考えるに、己の身の危険をかえりみず、自身の恥を雪ぐ作法なのだ、と雪絵は理解した。しかし、

（確かに自分のやった業に対して、臆病風に吹かれたと思われるのは恥かもしれないけれど……でもそれを覆す為とはいえ、わざわざ兇行の場に何らかの痕跡を残すなんて、どうかしている気もする）

と、かつての組織での経験を踏まえての意見を持った。

これは“奇異”であるという点で、確かに珍しいのかもしれない。

「しかし、それが珍しいとされるのは、その行為が現代ではそれほど見受けられるモノではないから……じゃあないんじゃないかなあ。そうでしょう、獅士堂のおおあねさま
大姉様」

禿頭を巡らせて、清岸組長が上座の春花を見遣る。

その言葉に答えるように春花は猪口を持った手をおろす。

その悠然として静かな所作に、周囲の親分衆の背筋が物差しを入れたようにピンツと伸びた。

ことり、と猪口を膳の上に置いて、春花は伏せた瞳を開いて一同を見遣る。

緋色の瞳。

涙袋を持った女としての艶麗さが伴った目元でありながら、その危険さを孕んだ彩は鋭さとは違う魅力を湛えていて、静かな眼光は歴々の俠達を居竦ませる力を帯びていた。

（これが、獅士堂の頭梁としての春花さんの力だ……）

雪絵は一季節の間に、幾度に渡りこうした場に同席させられ、春花の普段の穏やかさとは違う、強い女侠としての一面を垣間見せられた。その度に、その力がどこからくるのかの深淵こそ解からないが、春花の力と器量の程をまざまざと再確認する雪絵だった。

静かなオーラを放ちながら、この刀に生きる者達の郷を支えている者の器を知る。

そして同時に、いずれ自らと同じ席に坐すことを、春花が自らに期待している事を意識させられ、煩慮せざるを得ない。それが今は考え及ばない事柄だっ

第二章 太刀の喙

たとしても。

五月のある日の夕餉の席。

屋敷にいる時には珍しく、春花が酒を呑んでいると思ったら、突然、頭である彼女の口から出た、

「雪絵にこの組を継いでもらおうと思っているから」

と言う言葉。

誰もが驚き、また酒を呑んで勢いで出た戯言の類と取る向きも、その場の組員達のほとんどに共通した対応だった。しかし、それからの春花は郷にとって害になる者を斬りに行く『狩り』に赴く自らの小隊に、雪絵を度々加え、自分に同行させることが目に見えて増えてきた。そして、組頭と幹部達が集う総会の席へも、繰り返し連れて行くようになったのだ。

これはもう、偏に雪絵に、一家の武俠としての仕事を覚えさせ、ゆくゆく関わり、連携を持つことが重要になるシマの親分衆と面通しをし、親睦を深める意図の表れであると、誰にも受け取れた。

現在もなお波が引いた訳では決してないが、一家の中にはそうした立場にされた雪絵に批判的な者も少なからずいる。（それは黒原などが挙げられるのは言うまでもないだろう）

しかし春花が一步も退く様子がなく、また白峰や左馬ノ介などの雪絵の側についてくれる人間も、それなりの数にのぼり存在したため、雪絵も周囲の反応に戸惑い、面倒に思いながらも取り敢えず、春花の意向に沿うように生活して、季節が移ろっている。

継ぐということや、頭となること。それは正直食指が動かない雪絵だったが、それでも春花に自分が何かを望まれている現在は、『それほど悪い感じではないな』、と総会の席にも渋らずに加わっていた。

今この場に雪絵が顔を並べているのには、そうした事情があったのだが、春花は必要最低限くらいしかこういう場で彼女に構う事をしない。それに殊更つまらなさを感じる雪絵でもないが。もともと猫可愛がりをされているわけでもなし。

しかしそれが春花にとって、『母』でありながら、この場では刀郷の西

第二章 太刀の音

半分を治める総元締めの頭としての威厳となって表れる。

静かな、しかし場に通る力のある声音で春花は言う。

「仰られる通りです。金居荘兵という武俠を斬った者は、複数で襲う闇討ちを画策し、行った。しかしどうでしょう、自らの卑怯な行為に恥じるべきところはない、と言わんばかりの作法を為して立ち去った。これが珍しいと言わずになんと言いましょう」

静まり、項垂れる者もいれば、頷いて返す武俠もいる。彼らの反応に眼光を走らせ、春花は続ける。

「しかし、礼節を通す者とはいえ、我らに仇なすのであれば、それは敵です。それがどこの者であろうともです」

「どこの者……？」

と、何人かが不可解そうな顔をするのに、白峰が応えた。

「青刃のシマは 『水』 が混じる、ということだな」

「そう、この地は東の四聖、青刃に任せておりますが、昔からこのシマは東西境界線に近く、東の者がちらほらと歩き回る事は、皆も周知でしょう」

「……今回の闇討ちを行った兇賊は、東の者である可能性がある」

補足する白峰に、春花が頷き、一同が唸る。

「青刃のシマでは春頃より、この界限で今回のような下手人のあがらない刃傷沙汰が続いておりました。そして狙われたのは全て、“混じった水” ではなく獅士堂に縁の者達です」

息を呑む親分衆。その中から啖呵を切るような声があがった。

「許すまじ！ それが本当なら奴らが獅士堂のシマに対して不軌を図つとるといふことだ。断固見つけて斬り捨てるべし！」

「そうじゃ！ 仁義の前にオトシマエつけさせたらなァ！」

「その通りですぜっ 大姐さん！」

ざわめきだす会合の場に、雪絵は魚の肝を口にしたようなしぶい顔をする。血気に色めき立つ男の群れは、どうも苦手だった。

そこに、カンッ！ と音が響く。

全員の視線が集まる先には、春花。彼女が猪口を手に、膳に叩きつけたのだった。

第二章 太刀の音

それに対して場が一斉に凧いのように静まりかえった。

「それは当然です。しかし皆様がた、我らは組のメンツ以上に尊ぶべき仁義が目の中にある……月艾組の親分様」

「……は、はい」

その春花の呼びかけに、清岸親分は汗をかいた頭を起こして、彼女をおずおずと見返す。

「金居莊兵は、どこかの組に^{ゆかり}縁のある者でしたか？」

「……はい、ウチの組で何度も用兵として加わってもらっていました。心の強い、良い武侠でした」

「頭……」

清岸と光取の反応に、周囲の親分衆もスジを理解する。真から掬すべきは狼藉者を誅し、排除することではないと……獅士堂の頭はその心を軽んじてはいけないと、一同に意識させたいのだと。

勿論、下手人は斬る――しかしそれは、組の沽券やメンツの為であるのは二の次なのだ。

西の総元締めとして、春花はシマに仇なす狼藉者も由々しき存在とわかって、しかし組の構成員への心遣いをおいて、いたずらに流血による解決を急ぐことを戒めている。歴々にそれを再認識させたのだ。雪絵も場の空気からそれを感じ、理解する。

「散っていった尊き武侠のために、必ずや賊敵を斬り果たしましょう。それが侠気持つ我らの務めです」

手の猪口を指し出しかざす春花に、組頭たちは頷き、彼らも自らの猪口を突き出し、飲み干した。

その様子を静かに見遣り、雪絵は一人思う。

(斬られた朋輩を思い遣る気持ちで敵を討つのは、確かに道理だけれど……任侠組の月艾組がウチを頼みにするのも別に良いのだけれど。それでも、これで闇討ちをした者達はこれから逆に狙われる立場になる)

静座をきちんとする様子とは裏腹な、その心持ちで雪絵は場を眺める。

(彼らは何故、これだけの大きな組に自ら背く?)

第二章 太刀の壱

次の料理が運ばれ、その膳をみながらも、多くの組を仕切る頭たちと、さらにその上に立つ存在である春花を見回し、雪絵は思った。

（何故この郷の武俠は、刀を振るうことに余計なモノを挟むの……。そんなモノは 『心』 だけでいい筈なのに……）

それは疑問ではあったが、同時に雪絵の心に差した 『何か』 だった。

その 『何か』 の正体を知らず、また今は誰もそれに答えを示してはくれない。

秋の虫は、我関せずと自らの^{さが}性を謳歌する。

……続く。